

書評：三浦綾希子著

『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ ——第二世代のエスニックアイデンティティ』

一橋大学大学院博士後期課程 藤 浪 海

1. はじめに

1995年末の時点で7万5千人弱であった在日フィリピン人は、その後エンターテイナーとしてだけでなく家事労働者や技能実習生としての来日も増加し、2015年末の時点でおよそ23万人にまで増え、日本の在留外国人数で中国、韓国・朝鮮に続き3番目に大きなエスニックグループとなっている。

本書が研究対象とするのは、そのフィリピン人の子どもたちである。従来のニューカマー教育研究では、学校や家庭に焦点が当たり、それ以外の多様な「育ちの場」に焦点が当たってこなかった。また「フィリピン人」か「日本人」かという二項対立軸の中で議論が進み、両者のグラデーションの中でかれら自身が織り上げる多様なエスニックアイデンティティについても取り上げられることがなかった。

著者はこのような問題意識を背景に、移民コミュニティという生活世界に入り込み、そのなかで生み出される学校外の「育ちの場」に着目する。そしてかれらがそこでいかなる資源を獲得し、そのアイデンティティを形成しているのか、その動態的な姿をエスノグラフィーの手法を用いて克明に描き出している。

2. 本書の構成

本書は大きく次の3つの部分から構成されている。まず第1章および第2章では、従来のニューカマー教育研究において資源の乏しい存在とされがちであったフィリピン人の母親像を覆し、資源形成の主体として彼女たちを捉えなおしている。

エンターテイナーとして来日した女性たちの場合、いわゆる市場媒介型移住システムによって移

住がなされ、日本でネットワークを維持することが困難になる。それに対し家事労働者として来日した女性の場合は相互扶助型移住システムによって移住しており、来日から定住に至るまで、先発者との間に作られるネットワークを利用していった。それは生活の安定化や子どもの教会や学習教室への参加に結びつき、さらに子どもへのフィリピン文化や規範、英語の継承にも寄与していた。

続く第3章および第4章では、学校ばかりに焦点を当てがちであった従来のニューカマー教育研究を批判し、学習教室や教会といった多様な「育ちの場」のなかで子どもたちが日本の学校で提供され得ない資源を獲得していく様相を明らかにしている。

まず第3章では教会における日曜学校とユースグループに焦点を当て、前者が親の子どもに対する教育期待を手助けする場であると同時に、日本社会や日本の学校の中での相対的剥奪感を克服する場でもあること、後者が子どもや若者にルーツの確認や承認を与え、規範を継承する場であることを明らかにしている。

次いで第4章では地域の学習教室について検討し、学校での学習を補完する場として日本人が作り上げた学習教室を、子どもたちが自分たちのニーズに合わせて再編成していること、この学習教室が日本社会で必要な学力や情報を身につけるだけでなく、マルチエスニックなネットワークを構築し、差異を承認する場として機能していることを論じている。

最後に第5章と第6章では、1.5世と日比国際児という育ちの過程の差異に着目し、かれらのエスニックアイデンティティが「正統な日本人」と「正統なフィリピン人」のグラデーションの中にあることを解明し、このことにより固定化したルーツを押し付けがちであった従来のニューカマー

教育研究の視角を批判的に捉えなおしている。

まず第5章では1.5世を取り上げ、滞日の長期化によって行動様式が「日本人らしく」なり、日本への愛着心も向上する一方で、フィリピンへの帰郷などを通してフィリピン人としてのアイデンティティをも維持し、ハイブリッドなアイデンティティを築いていること、ときにはかれら自身が異質性を強調し「手厚い支援」を受ける弱者という立場を部分的に甘受していたことなどを論じている。

続く第6章では日比国際児に焦点を当て、かれらが自身の経験のなかから「日本人らしさ」「フィリピン人らしさ」を象徴する特徴を習得し、場面に応じて「日本人らしさ」あるいは「フィリピン人らしさ」を呈示しつつ他者との間に境界線を引いていたことや、場合によっては日本社会で否定的な意味づけがなされることもある『「フィリピン」という出自』に代えて、祖父母のヨーロッパ系の出自を呈示することもあることを明らかにした。

長くなったが、以上が本書の要約である。

3. 本書の意義と課題

要約において既に示してきたように、本書は従来の日本のニューカマー教育研究における「日本人-外国人」という二項対立を問い直しハイブリッドなエスニックアイデンティティのあり様を示しただけでなく、学校外の「育ちの場」に光を当て、そのアイデンティティが形成される具体的な過程を明らかにしたという点にもうひとつの大きな意義がある。

これは学校や家庭に焦点を当てがちだった従来の日本のニューカマー教育研究の視点では決して達成できなかったものである。移民研究における知見を積極的に取り込み、子どもたちを取り巻くより広い社会的環境を読み解こうとする本書の姿勢は、日本のニューカマー教育研究が向かうべき今後の方向性を示す重要な指針となっているといえよう。

さらに、著者は大変控えめに「日本の」ニューカマー教育研究に対する貢献を述べるに留めているが、本書は欧米の移民二世世代研究に対しても

大きな意義を持つものである。欧米の二世世代研究——たとえばPortes and Rumbaut (2001=2014) の分節化された同化理論 (Segmented Assimilation Theory) やCrul and Schneider (2010) の比較統合環境理論 (Comparative Integration Context Theory) ——においては著者と同様に移民コミュニティにおける教育に着目していたとしても、それに対する評価は学業成績の向上につながるか否かという軸、あるいは上昇的社会移動をもたらすか下降的社会移動をもたらすかという軸に回収されがちである。それに対し、本書は関 (2002) の比較発達社会史の発想を下地としてアイデンティティという軸に着目することによって、かれら自前の豊かな営みと思想のあり様を、その生活世界の中で色鮮やかに描き出しており、根本的な視点の転換を促している。

本書は移民コミュニティに着目しながらもホスト社会の側からの視点、ホスト社会のバイアスを脱しきれずに、「統合」の観点ばかりが強調される傾向のあった欧米の移民二世世代研究のオルタナティブとなる研究であり、その意義は、決して「日本の」ニューカマー教育研究に対してのみ示されるものではないことをここに強調しておきたい。

このように本書は、日本のニューカマー教育研究についても、欧米の移民二世世代研究についても、それらの従来の発想を問い直し、研究の新たな地平を開いてくれるものである。しかしその企てが意欲的で画期的なものであるからこそ、そこにはいくつかの課題も残されているように思われる。以下ではそのなかで特に重要な3点について言及しておきたい。

第一点目として、この研究を「教育」研究という枠組みで捉えることができるのかという問題である。著者は本書をニューカマー「教育」研究という領域に位置付けて、その意義と課題について述べている。しかし本書で見た子どもたちのアイデンティティは、<教え-学ぶ>という関係を越えて、より広い社会的な環境の中で子どもたち自身が織り上げているように思われる。

そうであるとすれば、本書をニューカマー「教育」研究として位置付けることは果たして妥当なのだろうか。それとも、新たな研究領域を切り開

いたものとして解釈することができるのだろうか。従来の研究の前提となっていた発想を問い直す意欲的な研究であるからこそ、この点はもう少し踏み込んで述べてほしかった。

第二点目として、多様な「育ちの場」として指定できるのは、教会と学習教室だけかという問題である。本書の長所のひとつは、学校だけでなく多様な「育ちの場」に目を向けたところにある。この強みをさらに活かすとすれば、たとえばメディアのなかでたびたび登場し喧伝される「ハーフ」像、あるいは見た目から「外国人」であることをパッシングできずに街頭で受ける警察からの職務質問など、かれらを取り巻くより広い社会的な環境も射程に入ってくるのではなからうか。

そうであるとすれば、「ハーフ」「外国人」であることが現代日本社会というよりマクロな文脈のなかで、いかなるイメージを付与され、どのような意味を持っているのか、それが本書で検討してきたような教会や学習教室、そして学校や家庭などといったより下位の水準にある文脈にいかなる影響を及ぼしているのかについても検討も必要になってくるのではなからうか。この点についてはマクロ構造とミクロ構造との連関を指摘したOmi and Winant (2014) の人種編成理論 (Racial Formation Theory) など人種研究で蓄積されてきた知見を取り入れつつ、より広い視野から検討していく必要がある。

第三点目として、育ちの過程による差異とは、1.5世／日比国際児という差異だけかという問題である。著者は「フィリピン人の子ども」としてくくるのではなく、かれらのなかの育ちの過程の差異に着目し、それが本書のもうひとつの長所となっている。

しかし育ちの過程の差異とはそれだけであろうか。この点について考えを巡らせると、世代だけでなく、家族構成や居住地、階層、ジェンダーなど、かれらの内部に様々な差異の可能性が広がっていることに気付かされる。これらの点がいかにかれらの育ちとアイデンティティに影響を与えているのか。この点についてもさらに考察を深めていく必要があるのではないか。

以上本書の課題として3つの点を挙げたが、これらは本書の視点の新しさゆえのものである。と

りわけに後半の2点は本書の課題というよりもむしろ、教育研究や移民研究に携わる読者それぞれが著者の視野の広さから学び取り、自らの問題として引き受けていくべき点であろう。

本書から提起されたこれらの課題群をいかに今後発展させていくべきか。学校や家庭という場だけでなくより広い社会的な環境に目を向けた新しいニューカマー教育研究に向けて、そしてホスト社会への「統合」や社会移動という軸を乗り越えた次の段階の移民二世帯研究に向けて、本書は様々な可能性と課題を提示してくれている。

なお本書評は、＜教育と社会＞研究会2015年11月例会での議論、および著者である三浦綾希子氏からのリプライを踏まえて執筆した。

参考文献

- Crul, Maurice and Jens Schneider, 2010, "Comparative Integration Context Theory: Participation and Belonging in New Diverse European Cities," *Ethnic and Racial Studies* 33 (7) .1249-68.
- Omi, Michael and Howard Winant, 2014, *Racial Formation in the United States*, 3rd ed., London, Routledge.
- Portes, Alejandro and Ruben G. Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, Oakland: University of California Press (=2014, 村井忠政訳『現代アメリカ移民二世帯の研究——移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店).
- 関啓子, 2002, 『多民族社会を生きる——転換期ロシアの人間形成』新読書社.